

益田市長  
山本浩章

四方の守護神である四神のうち、東の「青龍」と西の「白虎」はすでに紹介しました。今回は南を司り、季節では夏に相当する「朱雀」について書きます。

平城京や平安京において「朱雀門」といえば、天皇のお住まいである大内裏の南側の正門として最重要の門でした。また、この朱雀門から南に伸びる道路を「朱雀大路」とい、都の中央を一直線に縦断するメインストリートでした。

朱雀は古代中国の五行思想では「火」に関連するとともに、伝説上の瑞鳥（めでたい鳥）である鳳凰ともしばしば同視されます。そして、龍とよく似たドラゴンが別にあるのと同様、朱雀や鳳凰に酷似する架空の鳥として西洋には「フェニックス」があります。フェニックスは、死期を悟ると自ら火中に飛び込み、一度灰になってから蘇生するとされ、「不死鳥」とも呼ばれます。こちら

赤い火と関連する点が興味深いところです。

私事ながら、「赤」には何かとご縁があります。一つは郷里や母校との関連です。徳川四天王の筆頭ともされた彦根藩初代藩主の井伊直政、およびその子直孝は極めて勇猛な武将で、常に徳川軍の先鋒を務め、戦場では鎧兜も幟旗もすべて赤く染めたことから「赤鬼」と恐れられました。その後、井伊家は譜代としては群を抜く35万石の大名として代々幕閣の重鎮となり、幕末に開国を断行した井伊直弼など数人の大老を輩出しました。

これらにちなんで、彦根藩校の流れをくむ母校の滋賀県立彦根東高校では、時代の先駆者となる果敢な精神を「赤鬼魂」と称し、これを校訓としました。近年、硬式野球部が全国大会に出場する度、応援団が甲子園球場のアルプススタンドを真っ赤に染め、注目されました。

さらに言えば、私が学んだ大学は「淡青」つまり水色をスクールカラーとする一方、「赤門」でも有名です。ついにながら、4年に1度の夏の活動においても赤をイメージカラーとして市中を駆け回ります。

昨年の夏は例年のない猛暑に見舞われましたが、しばらくは暑い夏が続くような気がします。



## 中世益田講座「益田氏 VS 吉見氏」(全7回)

### 第4回 長門国阿武郡をめぐって

【問い合わせ先】市文化財課 ☎31-0623

天文20（1551）年、大内氏重臣筆頭陶晴賢（当時は隆房）らによる主君大内義隆に対する下剋上が起こります。この下剋上に積極的に関与していたのが、安芸・備後（広島県）では毛利元就であり、石見西部では益田藤兼でした。彼らはそれぞれ下剋上の計画を事前に陶晴賢らと打ち合わせ、周辺の領主達に協力を取り付ける役割を担っていました。

下剋上が成功した後、陶晴賢は大内氏の実権を握り、競合する大内氏重臣や有力な領主を攻撃していきます。そして、天文22年末頃から陶氏・益田氏は、以前から仲が悪かった吉見氏を共同で攻撃しました。ところが、翌23年、毛利氏は陶氏を危険視し、これと断交、陶氏・益田氏は吉見氏といつた和睦し、益田氏は東の三隅氏に矛先を向け、三隅沿岸部を制圧します。陶氏は毛利氏を倒すため安芸へと転戦しますが、弘治元（1555）年の厳島の合戦で戦死してしまします。

毛利氏は大内氏の本拠周防に侵攻し、吉見氏もこれに呼応して、嘉年、渡川を攻略して山口に迫ります。毛利氏は山代地方などで苦戦しており、毛利元就は吉見氏に負けていられないと記しています。一方、益田氏も大内氏を見限ったの

か、田万、小川や須佐などに勢力を広げ、もともと預けられていた大井・川島とあわせて、阿武郡（山口県北部）の沿岸部を制圧します。こうして大内氏滅亡時、阿武郡の沿岸部は益田氏が、内陸部は吉見氏が制圧していました。その後、益田氏は毛利氏との和睦を進めますが、その間に吉見氏は大井や川島を占領します。さらに、毛利氏と和睦した益田氏が永禄5（1562）年に毛利氏の石見侵攻の援軍として東部に軍勢を向けた際に須佐を攻略します。

結果、毛利氏の周防・長門支配のもとで、吉見氏は阿武郡のほぼ全域を支配し、毛利氏にも認められていました。一方、益田氏は本拠に接する田万や小川をなんとか死守したのでした。



関係地名図